

縄文の森から 第14号 目次

後期旧石器時代前半期における種子島地域出土石器の残存デンプン分析
寒川 朋枝・・・3

深浦式土器に見る文様割付の時期的変化について ―細山田段遺跡を中心に―
相良 典隆, 森えりこ・・・11

鹿児島県における弥生時代～古墳時代初頭の墓の基礎的な研究
-覆石墓・葺石墳・配石墓, 壺棺墓・甕棺墓, 石棺墓, 木棺墓, 支石墓の集成と考察-
湯場崎 辰巳・・・20

近世鹿児島城下町についての考察
阿比留 士朗・・・30

令和2年度年報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

近世鹿児島城下町についての考察

阿比留 士朗

Study on The Early Modern Kagoshima Castle Town

Shiro Abiru

要旨

本稿では、鹿児島城の変遷と共に、その城下町の特徴について考察を行う。近世鹿児島城及び城下町が城山の形状を基準として形成されているが、軍事的な側面のみならず、都市計画にも重要な役割を果たしていることに注目する。

キーワード 鹿児島城、近世城下町、城山、構成階層、町割り

1 島津の本城と城下町について

(1) 島津氏本城の変遷

島津氏は南北朝期の1341年に矢上氏の東福寺城を攻略し、東福寺城に入城して以来、中世から藩政期に至るまで本城を現在の鹿児島市北東部に置いた。東福寺城以降の島津本城は、1387年に清水城、1550年に内城と変遷していくが、いずれも近接した場所である。清水城は麓の居館とその背後の山城をセットとし、内城は居館

を新城としながら詰城は清水城の山城をセットとした。そして、1601年からは内城の南西側に近世城郭である鹿児島城の築城を開始し、明治の廃藩置県まで薩摩藩の政治・文化の中心地として機能した。

守護大名から近世大名として14世紀から19世紀まで本城の変遷(図1)はあるものの、一貫して本拠地が変わらない島津氏は稀な存在であるといえる。



図1 島津本城変遷位置図 (スタンフォード大学公開 1920 (大9) 5万地形図を加工。任意縮尺)

(2) 近世鹿児島城の城下町

東福寺城から鹿児島城まで近接した変遷が行われたため、中世城下町の様相は近世城下町や近世城下町を基準とした現代の都市計画に組み込まれ不明確である。近世鹿児島城下では本丸と二之丸を境に北東側を「上」、南西側を「下」とし、武家地はそれぞれ上方限、下方限と呼ばれる（小林 2018）。本稿では武家地という限定的な範囲を呼称する以外は、地区を表す上や下に（方限）と付けて記載する（以下、「上（方限）」「下（方限）」）。上（方限）は上級武家の居住地区や寺社町で、島津の菩提寺である福昌寺や清水城跡の大乗院、内城跡の大龍寺等の寺院が立地しており、中世城下も上（方限）に位置する。下（方限）は甲突川の流路を変更する（小林 2018）など鹿児島城とともに整備された新しい町であ

るといえる。近世期の鹿児島城下町について東和幸氏が研究史や城下形成の計画性及び思想について詳しく論考している（東 2014）が、現在の市街地化された町と近世城下の町割がどの程度残存しているのか復元案を作成し、城下の整備について考察したい。

2 近世城下町の復元案

(1) 使用した絵図史料

鹿児島城下を描いた絵図は江戸期に複数枚描かれており1)、鹿児島城下の変遷を追うことが出来る（三木 2018）。知られている最古の城下町絵図は寛文 10（1670）年で、この段階では築地が未完成であることが確認できる。また、正徳 3（1714）年と宝暦 6（1756）年の絵図を比べると鹿児島城正面に配置した延焼防止の



図2 通り名称。左は現「なや通り」、右は成尾絵図「納屋通」

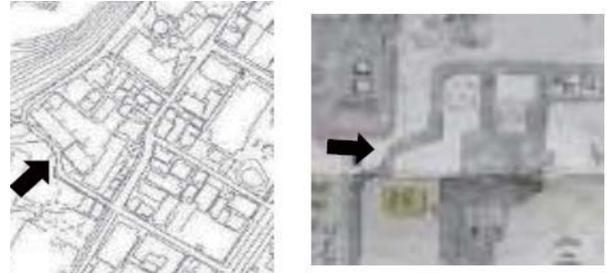


図3 特徴的な地割



図4 鹿児島城屋形及び周辺図（鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画より転載）

空閑地である明地の面積が広がっている。このように江戸期においても鹿児島城下の土地利用の変更は綿々と行われているが区画自体を大きく変更するような変化はみられない。

江戸期の鹿児島城下を描いた最も新しいものは成尾常矩の「鹿児島城屋形及び周辺図」(図4)が知られる。この絵図については三木靖氏が詳細に報告をしている(三木 2016)。簡単に紹介すると、金山奉行であった成尾常矩が明治6(1873)年に記憶を頼りに絵図にしたものであった。しかし、西南戦争の戦災により痛みが著しくなったため、明治11(1878)年に改めて書き写したものである。

この「鹿児島城屋形及び周辺図」(以下、「成尾絵図」)を現在の鹿児島市街地図上に合わせ、区画の残存状況を検証してみた(図5)。地図上に落としした情報は、灰色は道路、水色は堀、破線は絵図敷地の境界を示す。また、赤字は現在の建物表記である。また、復元案では方位を示すために、北を上面とした地図をそのままの状態で使用した。

成尾絵図から現在の地図に落とし込む方法としては、鹿児島城、南泉院(現:照国神社)等史跡や、名山堀、通り名(図2)など、現在でも使用されている名称を頼りにしたほか、絵図、地図の特徴的な地割(図3)を表

している所を参考に作図していった。復元案では成尾絵図のように均等な区画でない箇所も出てくる。

西南戦争や太平洋戦争での鹿児島空襲の戦災、戦後の市街地化による区画の統合、道路拡幅等や外堀、海岸の埋立てによる陸地化など様々な要因で、現在、大きく様変わりをしていると思われた。しかし、復元案(図5)を作成した結果、小さな路地や鍵の手状の道路などの消滅はあるものの、主要幹線や区画自体は旧状を留め、市街地化していったことが看取された。このことから鹿児島城前面に限るが、江戸初期からその区画は継承していったと考えたい。

(2) 絵図に描かれた鹿児島城下の範囲について

まず、鹿児島城下の範囲について考察したい。複数枚現存する鹿児島城下絵図では大きく2つの範囲を描く。ひとつは元禄9(1696)年の絵図や、その絵図を踏襲していると思われる正徳、宝暦の絵図が該当する。いずれも鹿児島城及び城山を中央上部に配置し、吉野橋堀、名山堀、俊寛堀を含めた南側外堀内の区画を対象として詳細表示している。成尾絵図もこの範囲に類似するよう作図されている。もうひとつは現在確認されている最古の鹿児島城下絵図で、寛文10年に描かれた絵図である。北は東福寺城跡から清水城跡の丘陵に沿って、西は城山に、南は甲突川、東は海岸線に囲まれた中に区画が描か

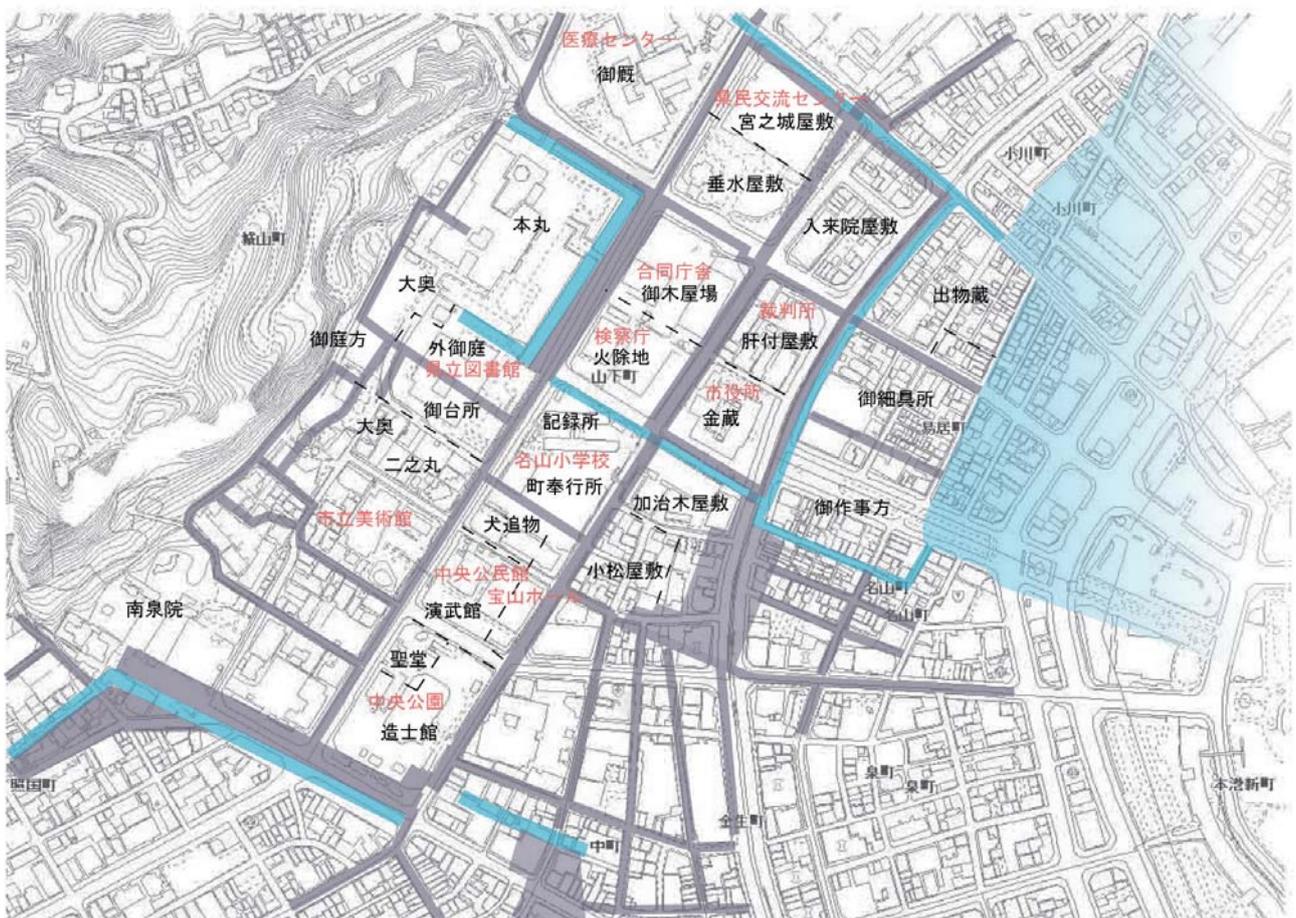


図5 鹿児島城下復元案 (かごしまiマップ 都市計画マップ使用 図2・3も同様)

れている。天保14(1843)年の城下絵図でも同様の範囲である。

この2つのパターンの絵図が意味するものについてであるが、寛文の絵図に代表する範囲は、いずれも丘陵地や、河川及び海岸の防衛に必要な障壁内に区画が描写されている。このことから、寛文や天保14年に描かれた絵図範囲は鹿児島城の総構えを表していると考えたい。また、元禄の絵図に代表される外堀範囲内は、本丸、二之丸以外を実質的な三之丸として考え、鹿児島城本体と認識していたのではないと思われる。外堀内では島津一門など上位家格の屋敷や記録書、御厩など行政機関も存在していた。また、小林氏も実質的な三之丸相当機能と指摘している。

(3) 鹿児島城下の町割について

城下絵図の範囲は2つのパターンがあるが、描写についても2つのパターンがある。それは、直線を主体で描くものと曲線も使用するものである。成尾絵図を現在の地図に落とし込んだ際、絵図とは違い歪な区画や弧を描く地割もある。名山堀は特に顕著である。安政6(1859)年頃に描かれた「旧薩藩御城下絵図」では名山堀は弧を描くように描かれて現在の町割に近い。三木氏は成尾常矩自身の言葉から、天保年間の絵図を参考に藩政期末の状況を反映させたと指摘している。このことから直線的な町割で描いた「天保年間鹿児島城下絵図」を参考にした結果、成尾絵図も直線主体の絵図になったと考えるが、本来は「旧薩藩御城下絵図」や現在の地割のように直線が主体だが、すべてが直線の区画、町割ではなかった。

3 城下整備について

(1) 城下整備計画についての考察

復元案を作成した結果、現在でも土地区画は旧来の状況を留めており、城下全域でも区画の残存状況は良いと判断し、近世城下町の形成について考察する。近世城下町については先行研究で思想的な部分や計画性について先学諸氏が考察してきたが、また、違った視点で城下の町割や整備計画を考えてみたい。

航空写真で鹿児島城下の垂直アングルを確認すると、鹿児島城及び下(方限)が城山の角度と同一の整然とした町割であることがわかる(写真1)航空写真だけでなく、絵図の描写にも城山の裾の角度が意識的に描かれている。元禄、宝暦の絵図では南泉院に沿う外堀の角度、天保の絵図では町割が、それぞれ城山裾部と同一角度で描かれている。

東氏も論考の中で「城山の地形に平行した方向に馬場を通す」と着眼している(東2014)。ただし、「城山の地形に平行した方向に馬場を通す」については、城山前面の面を揃えた可能性も指摘している。これは、道路先行施工か道路基準先行施工かの順序によっては、馬場に

合わせて城山の角度も作られたとも捉えられる。鹿児島城普請に際しては大規模な削平、盛土を伴う造成が行われたと考えるのが普通であり、城山から土砂を運搬するのが最も手っ取り早い。だが、慶長6年の築城開始から慶長末に完成する期間の中で、作事の期間も入れると普請に長い期間と人員を割く時間的な余裕があったのかと思われる。ここは単純に城山が正面に見えるよう町を整備していった結果であると考えたい。前述したように下(方限)は鹿児島城築城に伴い開発された地区であることから、鹿児島城及びその前面と同じ基準、計画に沿って整備したものとする。同じ基準とは城山の裾を基準に測量を実施したことである。

鹿児島城前面の直線道と外堀から甲突川までの直線道の変化点は外堀にある。鹿児島城前面の直線道と外堀が直角になる。このことから想定される城下の整備計画は、まず、本丸、二之丸の位置を城山の裾から計測し、必要な面積を確保した後に、外堀を直線道に直交するよう城山側に作る。次に、外堀から甲突川までの城下形成も城山裾から計測した。と考えたい。

上(方限)については、下(方限)を反転させたような角度の町割も見受けられるが、整然としない。図1の大正期の地図を見ると、清水城や内城を基準としたような区画が目立つ。天保の絵図でも、甲突川に架かる西田橋から新橋までの幹線道は直線的な道であるが、新橋から上(方限)は網目状の道となる。また、道路整備と同様、下(方限)では、方形及び長方形を基準とした区画であるのに対し、新橋より北東側の上(方限)では、歪な区画も見られる。この地域は、写真1にみられるように丘陵部が多いことや、整然としない町割は中世城下町の名残や、旧城来の寺院等によって大幅な土地の再整理が出来なかった、などさまざまな土地利用の制約があったと考える。

上(方限)は上級武家屋敷や寺院からなる地区である。一部、海岸部の上町に中世以来の町人地はあるものの、商工業地区など経済活動地区や流通拠点等は甲突川、稲荷川河口部や築地を含めた海岸域が担うことから、さまざまな土地制約のなかで、大規模に整備する必要性のない地区であったのではないと思う。

(2) 城山の評価

今回、近世鹿児島城及び城下町が城山の形状を基準として形成がされていたことを推察した。現在の城山の評価は鹿児島(鶴丸)城跡保存活用計画でも見られるように、主に築城期や江戸時代初期の幕府への警戒心から造られた詰城として軍事防衛面で必要な要素であることが評価とされている。一方、安定した時代については城山の機能、役割面では存在意義が薄い。これは平時における城山の在り方で、比較的平和な時代であった江戸時代

は、城山が機能することはなく鹿児島城とともに終焉を迎えた。ここからは想像の域を出ないが、西南戦争時に薩軍が城山にある旧二之丸に本営を置き、城山を中心に戦闘を展開していたことから、戦時とくに陸上戦における城山の重要性や戦略性が教育で伝えられていたことを想像する。

城山は、今までの軍事的な側面以外にも都市計画に重要な役割を果たしたと評価したい。

3 おわりに

近世鹿児島城は城山を中心とした城下町の開発を行い、旧城を含む旧城下町地区と新設の城下町地区で構成され、歴史的伝統地、言い換えれば土地の格によって構成階層の振り分けが行われたと推測する。単純に上（方限）は江戸方向側であるから「上」となっただけでなく、中世以来の伝統地が格、価値、居住者ともに上位に置かれていたことから上（方限）となったのではないかと。また、鹿児島城前面に限るが、復元案を作成した結果、町割が良好に残存する結果となった。上、下（方限）についても同様に町割りの残存状況は良好であると考えている。上（方限）の中世段階の様相については、近世段階の痕跡を文献また、考古学的手法によって丁寧に選別していけば中世城下町の様相が明らかになるのではないかと。一時は九州の大半を制覇するまでとなった戦国大名島津氏の中世城下町の整備プランや城下の機能や施設の解明また、なぜ当地を本拠地にし、遷地を重ねたのか等興味は尽きない。

1) 各種絵図については「鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画」や三木靖氏の「古絵図等に見える鹿児島城」がWebで閲覧可能であることから参考にされたい。

参考文献

- 御楼門建設協議会・鹿児島県（2016）『鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画』
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター編（2020）『鹿児島（鶴丸）城跡-御楼門跡周辺-』鹿児島県埋蔵文化財センター埋蔵文化財報告書（205）鹿児島県埋蔵文化財センター
- 東和幸（2013）「鹿児島（鶴丸）城前後の城と町づくり」『縄文の森から』第6号 鹿児島県埋蔵文化財センター
- 東和幸（2014）「鹿児島（鶴丸）城下の計画性」『縄文の森から』第7号 鹿児島県埋蔵文化財センター
- 三木靖（2016）「史料紹介；成尾常矩「鹿児島城屋形及び周辺図」」『鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告』第13集 鹿児島国際大学国際文化学部博物館実習施設考古学ミュージアム
- 三木靖（2018）「古絵図等に見える鹿児島城」『鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告』第15集 鹿児島国際大学国際文化学部博物館実習施設考古学ミュージアム
- 小林善仁（2018）「絵図にみる鹿児島城と城下町」『大学の鹿児島ガイドーこだわりの歩き方』鹿児島大学法文学部編

